

目的 女子高校生夏制服(ブラウス)の着用期間は、梅雨から初秋にかけての高温で紫外線の強い時期であるため、ブラウス生地の変性が極めて大きいことが予測される。既報(1)2)では女子高校生を対象として、実際に着用した夏制服を収集し、着用条件及び着用部位と生地の劣化状態の関連性について調べてきた。その結果、夏制服は強度的には3年間十分耐えうる生地であること及び生地の吸水性が極めて悪く個人差、着用部位依存性が見られた。ここでは、夏制服の吸水特性と着用部位との関係に注目し、着用した生地に浸せき処理を施した後の生地の吸水性能を比較した。

方法 市内高等学校より収集した夏制服(17着)をそれぞれ水衿、裾、胸、背中、袖の各部位ごとに採取し、それぞれに浸せき処理を施した。処理剤には、合成洗剤(弱アルカリ、中性)粉石鹼、塩酸1%溶液、ベンゼン/アルコール=2/1混合液を用いた。浴比1:30で15min浸せきの後水洗を5minで3回施した。その後、試料は風乾した。物性は、吸水速度、接触角、保水性について測定した。

結果 生地に対する吸水時間と接触角との間には相関性があり、特に背中、衿の部分の撥水性の程度は大きかった。生地に各種浸せき処理を施した結果では、ベンゼン/アルコール混合液で処理した場合に接触角の大幅な低下が認められ、生地の付着物除去に対して溶剤処理が効果的であることを示唆させる。

- 1) 森 信子 本学会第37回研究発表要旨集B-75(1985)
- 2) 森 信子 本学会第39回研究発表要旨集B-116(1987)